

「地域ささえあい助成」申請への説明補足

1 子供たちへの車椅子体験の目的

一般社団法人 Smile Again は、子どもたちへの車椅子体験活動を9年間継続して実施している。本アクションは、子どもたちが実際に車椅子に乗り、移動や周囲との関わりを体験することで、障害や高齢を「特別なこと」としてではなく、誰にとっても身近な社会課題として捉える視点を育むことを目的としている。

体験を通じて生まれた気づきは、家庭や地域へと広がり、街の受入意識や行動の変化につながっている。高齢化が進む社会において、車椅子を希望ある選択肢として受け止められる土壌を、次世代と共につくるオープンケアの実践である。

2. アクションの概要（要点）

- 対象：小学生・中学生・保護者・地域住民
- 内容：車椅子体験・当事者による対話・バリアの気づきを共有するワーク
- 特徴：当事者/支援者の固定化を避け、役割が循環する設計
- 継続性：9年以上の学校連携実績と地域展開
- 波及効果：家庭・地域での配慮行動の自発的な広がり

実際のアクションの様子（写真による補足）写真①



※小中学校での講話・車椅子体験)

代表自身が車椅子利用当事者として、小学校の児童に向けて直接語りかけている様子。突然車椅子生活となった自身の経験や、困ったときに「助けて」と言えることの大切さを、子どもたちの目線で伝えている。知識の提供ではなく、対話を通じた理解を重視している点が本アクションの原点である。

写真② (※新聞・雑誌掲載記事)

子育てと車椅子生活を両立しながら、社会活動を継続してきた代表の歩みが紹介された記事。「バリアをなくせば、心はフリー」というメッセージは、Smile Again の理念の根幹をなしている。本活動が一過性のものではなく、長年にわたり社会に発信されてきた実践であることを示している。



週刊女性「人間ドキュメント」に掲載される

写真③ (※学校施設内での車椅子操作・体験)

子どもたちが実際に車椅子を操作し、下駄箱や廊下など日常空間を移動している様子。段差や狭さに直面することで、「なぜ困るのか」「どうすれば一緒に動けるか」を自然に考えるきっかけとなっている。体験を通じた気づきを重視したアクションである。

体育館の出入口において、子ども同士が協力しながら車椅子での移動を体験している様子。支える側・支えられる側を固定せず、互いに立場を入れ替えながら学ぶことで、自然な思いやりと行動が生まれている。



私の経験（中学校での車椅子体験）



（※地域・保護者を含む体験）

子どもたちの活動をきっかけに、保護者や地域の大人も車椅子体験に参加している様子。子どもから家庭、地域へと学びが波及し、街全体の受入意識や行動の変化につながっていることを示している。

2. 写真から読み取れるオープンアクションの意義

これらの写真が示す通り、Smile Again の車椅子体験活動は、単なる福祉教育やイベントではなく、子どもたちの日常空間を舞台にした継続的な学びの場である。

代表自身が当事者として関わることで、車椅子は「特別な存在」ではなく、「身近な選択肢」として受け止められている。子どもたちの体験は家庭や地域へと共有され、街の雰囲気や人々の行動を少しずつ変えてきた。

高齢化が進む日本社会において、車椅子を使うことが不安や絶望ではなく、希望につながるものであるという視点を、次世代と共に育てている点に、本アクションの意義がある。



写真は子供たちの車椅子体験をはじめ高尾山に電動車いすの充電器設置が実現して、優しいまちに波及している

©2026年1月東浅川小学校では・2025年に引き続き陵南中学校生徒有志によるこの体験学習時に小学生生徒へのサポートが始まっている。



← 有志中学生との事前打ち合わせ

2026年2月26日

経済産業省主催 OPEN CARE AWARD2025 にて審査員特別賞受賞

経済産業省ホームページにてご紹介しております。

OPEN CARE PROJECT AWARD 2025 (METI/経済産業省)

<https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/kaigo/opencareproject/award_2025/index.html>

介護を「個人の課題」から「みんなの話題」へ転換する取組を表彰する「OPEN CARE PROJECT AWARD 2025」表彰式を開催しました | OPEN CARE PROJECT PR 事務局のプレスリリース

<<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000006.000151518.html>>



21:54 47%

Q https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_s...



いま当たり前になっていること。
そのすべにて、はじめての一步がある。

約300万人が働きながら介護をする時代。
個人の課題に閉じがちな介護を、
もっと、話しやすくするために。

「介護＝仕事と両立しづらい」をくつがえす職場環境づくり
から
「介護＝暗いイメージ」を変える実体験まで、
介護をひらく、企業や人を表彰します。

時代は変わる。変えようとする人がいるならば。
その一步目を、いま讃えたいのです。

**OPEN CARE PROJECT AWARD
2025**

受賞結果を発表しました。

ページ先頭へ



審査員賞

希望は、車椅子から始まった — 30年の車椅子生活が、世界と未来をひらいたオープンケアの物語 —

柳田 美知子

私が車いす生活になって30年が経つ。
当時、娘たちは1歳、4歳、7歳。 私は突然、重度障害を持つシングルマザーになった。
バリアフリーという言葉もまだ一般的ではなく、
段差だらけの街で子どもを育て、働き、生きていくことは決して簡単ではなかった。

「希望は、車いすから始まった — 30年の車いす生活が、世界と未来をひらいたオープンケアの物語」

私が車いす生活になって30年が経つ。

当時、娘たちは1歳、4歳、7歳。私は突然、重度障害を持つシングルマザーになった。

バリアフリーという言葉もまだ一般的ではなく、段差だらけの街で子どもを育て、働き、生きていくことは決して簡単ではなかった。

それでも、重度訪問介護をはじめとするケアの存在に支えられ、私は少しずつ「助けを受けること」を受け入れていった。

ケアは私を弱くするものではなく、社会と再びつながるための“扉”だった。

やがて私は外に出るようになり、観光地のモニターとして活動する機会を得た。

娘や孫と三世代で旅をする中で、車いすでも楽しめる場所、そうでない場所がはっきりと見えてきた。

私の存在そのものが、観光地にとっての「気づき」になっていると感じられた瞬間だった。

転機は、看護師としてナイジェリアを訪れたときだった。

車いすがなく、地面を這うように生活する若者たちを目の当たりにし、私は強い衝撃を受けた。

同時に、日本で車いすと共に生きてこられた自分が、どれほど多くのケアと制度に支えられてきたのかを実感した。

「日本で役目を終えた車いすが、誰かの希望にならないだろうか。」

そう思ったことが、ナイジェリアへの車いす寄贈活動の始まりだった。

車いすは、単なる道具ではない。

移動の自由は、学ぶ機会を生み、働く可能性を広げ、未来への希望へとつながっていく。

ケアを受けてきた私だからこそ、その価値を誰よりも知っている。

かつて「支えられる側」だった私は、今、希望をつなぐ側にいる。

オープンケアとは、制度を開くことではなく、人の人生が社会や世界へと開かれていくこと。

私は自らの歩みを通して、その意味を学んできた。 櫛田美知子

⇒こんな思いで地域で一般社団法人 Smile Againとして取り組んでいます。